

ULTRA PLINIAN

KUNST ARZT では、昨年に引き続き 3 度目となる
山下茜里の個展を開催します。

山下茜里は、眼球剥き出しの皮膚を剥がされたような人体表現
を通して、ヒトの本質を追究するアーティストです。

染色技法を駆使し、膨大な時間を費やして丁寧に生み出された
“血肉” 生地で、壁面全体、床面全体を覆い、まるで建物と一
体化したようなインスタレーションを展開したり、人体のス
ケールを超える立体像を作ったり、時には眼球部分のみで圧倒
的な存在感を見せてきました。

「最大級の爆発」を意味する「ULTRA PLINIAN」と題された本展。
お楽しみに。

(KUNST ARZT 岡本光博)



naked No. 11

2023

綿布、反応染料、わた、木材

身長約 180cm

経歴

1997 年 大阪に生まれる

2021 年 京都精華大学博士前期課程修了

個展

2020 年 BORDER (KUNST ARZT/ 京都)

2020 年 PANOPTICON (gallery maroine/ 京都)

2021 年 beyond the skin (楽空間祇をん小西/ 京都)

2022 年 NAKED (KUNST ARZT/ 京都)

主なグループ展

2018 年 SEIKA-Jack (ギャラリーフロール/ 京都)

2019 年 you can be the outcast (アートギャラリー北野/ 京都)

2019 年 祈り -9stories- (gallery maronie/ 京都)

2020 年 TEXTILE2020 (gallery maronie/ 京都)

2021 年 PICKS (サテライトスペース Demachi/ 京都)

2021 年 A-Lab Artist Gate 2021 (あまらぶアートラボ A-Lab/ 兵庫)

2021 年 体内で満ちて (ART SPACE NUI/ 京都)

2021 年 第 23 回染・清流展 (染・清流館/ 京都)

2021 年 VIGOR (gallery maronie/ 京都)

2022 年 創造的ドローイング展 (サテライトスペース demachi/ 京都)

2022 年 Kyoto Art for Tomorrow2022- 京都府新鋭選抜展 - (京都文化博物館/ 京都)

2022 年 第二回京都の染色 - 世代をつなぐ女性作家たち - (ギャラリーヒルゲート/ 京都)

2022 年 瀬戸内国際芸術祭 2022 (高見島/ 香川)

2022 年 新進作家展 (京都文化博物館/ 京都)

2023 年 Kyoto Art for Tomorrow2023- 京都府新鋭選抜展 - (京都文化博物館/ 京都)

2023 年 新鋭染色作家展「柳は緑 花は紅」(染・清流館/ 京都)

2023 年 9 月 23 日 (土) から 10 月 1 日 (日)

12:00 から 18:00

9 月 30 日 (土) のみニューブランシュ参加のために 12:00 から 21:00

会 場 : KUNST ARZT

605-0033 京都市東山区夷町 155-7 2F

問い合わせ



KUNST ARZT 代表 岡本光博

090-9697-3786

kunstarzt@gmail.com

山下 茜里 個展
YAMASHITA Akari solo exhibition



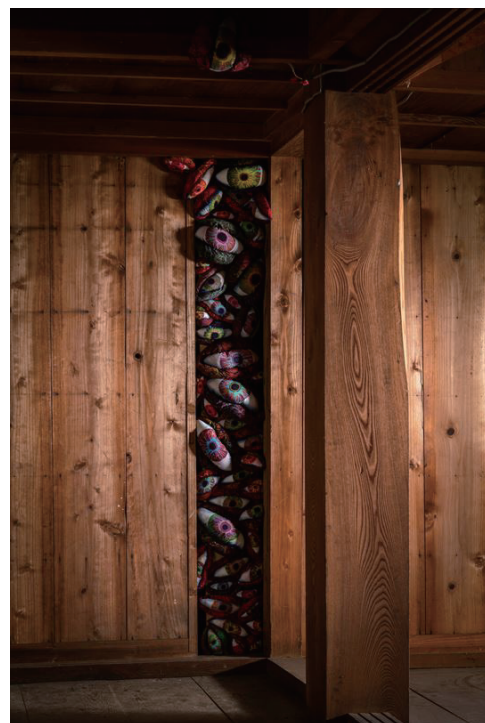
ULTRA PLINIAN

アーティスト・ステートメント

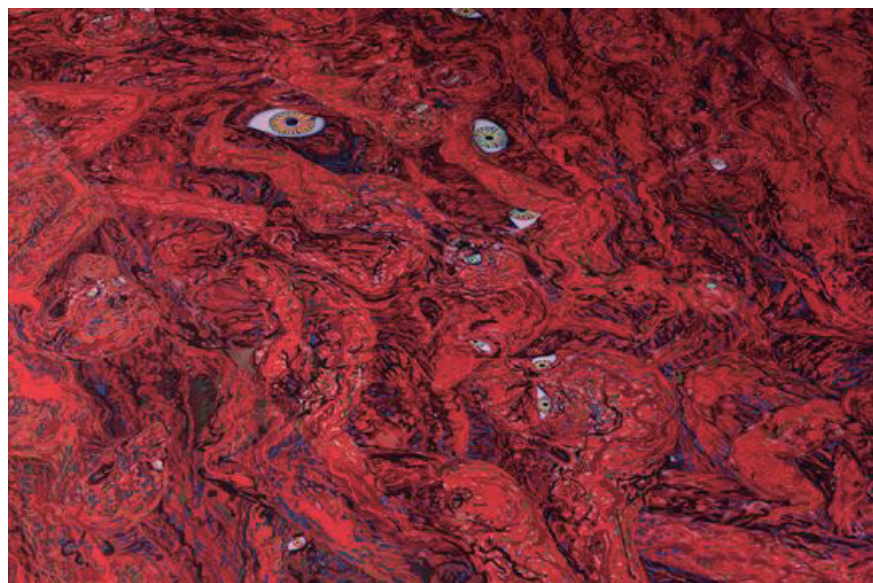
身体の手前で張り巡らされている無数の管
血液を通して様々なものが行き交うこの身体は、常に熱を帯びている。
真っ白な布の上に熱い蠟が走り、幾層にも重なり、やがて思い描く形に見えてくるその様は、
およそ40週間の時間をかけ、何もなかった母体からみるみるうちに形作られていく人間のようだ。
私は、重ねた熱の痕跡で「人」を作っている。
「人」を作るのに適した方法がこれだと思っている。
自分、そしてこれまでに会った人々、その誰しもが「ヒト」という単一の生き物だ。その明白な事実と、
自分が「人間」であることへの執着、生き物としての「ヒト」への強い興味から、「人間」を表現し続けている。
かつて遭遇した、ヒト特有の「ことば」や「ふるまい」「おもい」を基に作品を制作している。
そして、それを誰かに見られている光景をわたしが見つけ、そうした行為の流れの中にわたしの作品は存在している。
また、「目」はわたしが「人間」を表現する上で不可欠な要素だ。
人の目は、他の生物にはない独特な眼差しと、その内にある個人性を強く覗かせている。
それは「目」が人体で唯一むき出しにされた透明の臓器だからかもしれない。
自身の内と外を通ずる唯一の窓だからかもしれない。



(photo by Mitsushige Kida)



(photo by Mitsushige Kida)



(photo by Keizo Kioku Shintaro Miyawaki)

Re:mind
2022
綿布・反応染料・わた
瀬戸内国際芸術祭2022での展示風景

「家」は人が整え、人が暮らすところ。
「家」は人がそこで生きることで初めて成り立つ場所。
「家」にはそんな人の気配が溢れていた。

人がそこを去れば、その気配は自ずと消える。
そして抜け殻のようになった「家」は
形としてはそこにあり続ける。
ただそれは、本当に「家」なのか。

人はそこに、たくさんのモノを隠してきた。

人の気配が消え去ったあと、
次にはこのモノの気配が充満してくる。
ぎゅうぎゅう詰めの押し入れの襖が開かれるときを、
彼らはじっと待っているのかもしれない。

何か一枚隔てたそのさきに、
たくさんのモノが隠されている。
もしそれが、剥がされ、めくられ、陽の下に暴かれたと
き、隠されていたモノたちは何を思うのだろうか。
今まで見る事のなかった初めての光景に
どのような眼差しを送るのだろうか。

わたしはそんな「家」を少しだけめくる。